第二講　演習問題 一・二・三

一　次の文章を読んで、後の（1）〜（5）に答えよ。

周ニ有リ二申喜ナル者一、亡フ二（注一）其ノ母ヲ一。A聞乞（注二）人歌於門下而悲シミレ之ヲ、動ク二（注三）於顔色ニ一。謂ヒテ二（注四）門者ニ一、内レシメ二乞人之歌フ者ヲ一、自ラ見テ而問ヒテレ焉ニ、曰ク、「何ノ故ニシテ而乞フ。」B与レ之語ルニ、蓋すなはチ其ノ母ナリ也。故ニ父母之於ケルヤレ子ニ也、子之於ケルヤ二父母ニ一也、一体ニシテ而両分、同気ニシテ而異息ナリ。若ク三草莽之有ルガ二華実一也、若キナリ三樹木之有ルガ二根（注五）心一也。C雖レ異ニストレ処ヲ而相通ジ、（注六）隠志相及ビ、痛疾相救ヒ、憂思相感ジ、生キテハ則チ相歓ビ、死シテハ則チ相哀シム、此レヲ之レ謂フ二骨肉之親ト一。神ハ（注七）出デ二於忠ヨリ一、而応ジ二乎心ニ一、D両精相得。E豈待レ言哉。

（『呂氏春秋』精通篇より）

（注一）亡…ここでは「生き別れる」の意。
（注二）乞人…乞食、ものごい。
（注三）動於顔色…顔色にまであらわれる。
（注四）門者…門番。
（注五）根心…根や芯。
（注六）隠志…憂え痛む心。
（注七）神出於忠…霊妙な思いが心の奥底から発出する。

（1）二重傍線部B「与」、C「雖」の読み方を答えよ。

B＝　　　　C＝

（2）傍線部Aの書き下し文は、ひらがなで「こつじんのもんかにうたふをききて」となる。これに合うように、漢文に正しく返り点と送りがなを付けよ。

聞　乞　人　歌　於　門　下

（3）傍線部D「両精相得」について、ここの「精」は「精神、たましい」を、「得」は「一体となる」を意味する。では「両精」とは具体的に何を指すか。その答えとして、次の ① と ② に適当な語句を挿入せよ。

① の精と ② の精

①＝　　　　②＝

（4）　傍線部Ｅ「豈待言哉。」について、①書き下し文にして、すべてひらがなで記せ。②また、その日本語訳として正しいものを、次のア～エの中から選べ。

ア　なぜ言うのを待たねばならないのか。
イ　言うまでもないことである。
ウ　言葉を待つことができる。
エ　言わないではいられない。

①＝

二　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（設問の都合上、返り点・送り仮名を省いた箇所がある）

袁随園宰江寧。城中韓姓女為風吹至銅井村。離城九十里。村氓次日送女還家。女已嫁東城李秀才子。李疑風無吹人九十里之理、必有姦約。控官退婚。袁曉(1)之曰、「古有風吹女子至六千里者。汝不知之乎」。李不信。取元郝文忠公『陵川集』、示之曰、「郝公一代忠臣。(2)豈肯作誑語者。第当年風吹呉門女、竟嫁宰相、(3)恐汝子無福耳」。李読詩大喜。両家婚配(4)如初。是知聴訴者当博古也。

（陸以湉『冷廬雑識』による）

注　袁随園…清の袁枚。　江寧……地名。　里……約五七六メートル。　村氓…村民。　嫁……縁組をすること。
控官……役場に訴えを起こすこと。　退婚……縁組を取り消すこと。　郝文忠……人名。　誑語……でたらめな話。
呉門……蘇州のこと。　聴訴……訴えを裁くこと。　博古…昔のことに詳しいこと。

問一 傍線(1)「之」が指すものとしてもっとも適当なものを左の中から選びなさい。

A 韓姓女　B 村氓　C 李秀才
D 李秀才子　E 官

問二 傍線(2)「豈」の読みを、送り仮名も含めて全て平仮名で書きなさい。（平仮名以外に何も書かないこと）

問三 傍線(3)「恐汝子無福耳」は「なんぢがこふくなきをおそるるのみと」と読む。これに従って、原文に返り点を付けなさい。（返り点以外に何も書かないこと）

恐 汝 子 無 福 耳

問四 傍線(4)「如ㇾ初。」の解釈としてもっとも適当なものを左の中から選びなさい。

A もとのままになった。
B なかったことにした。
C 最初からやり直した。
D 昔の例と同様だった。
E 詩とそっくりだった。

問五　本文の内容に合致するものを左の中からひとつ選びなさい。

A　袁枚は、人が颪で飛ばされる距離として、六千里より九十里の方が現実的だと考えていた。
B　訴えを起こした人物は、袁枚の該博な知識に基づく説得の結果、自分の非を悟るに至った。
C　袁枚は、博識によって、訴えを起こした人物を納得させるだけの判断を下すことができた。
D　韓氏の娘は、李秀才の息子と夫婦になれば、自分が夫の将来の出世に役立つと信じていた。
E　袁枚は、銅井村の村民と韓氏の娘の不適切な関係を隠すために、過去の伝説を持ち出した。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、設問の都合上、返り点・送り仮名を省略した部分、および文字を改めた箇所があります。

汝*南有於田得鹿者、(1)其主未往取也。商車十余乗*経沢中行、望見此鹿著縄、因持去。(2)念其不事、持一鮑*魚置其処。有頃、其主往、(3)不見所得鹿、反見鮑魚。沢中非人道路、怪其如是、大以為神、転相告語。治病求福、多有効験、因為起祀*舎、衆巫数十、帷*帳鍾鼓。方数百里皆来禱祀、号鮑君神。其後数年、鮑魚主来歴祠下、尋問其故、曰、「此我魚也、(4)当有何神。」上堂取之、遂従此廃。伝曰、「(5)物之所聚、斯有神。」言人共奨*成之耳。

（『風俗通義』による）

＊汝南——地名。今の河南省。

＊乗——車を数える単位。
＊鮑魚——塩漬けの魚。
＊祀舎——ほこら。
＊帷帳鐘鼓——とばりやかね・たいこ。
＊奨——あがめて、お供え物をする。

問一　傍線部(1)「其主未往取也」を、すべて平仮名を用いて読み下しなさい。

問二　傍線部(2)「念其不事」は、車の主が、何もしていないのに鹿を手に入れたことを気にして、という意味で、「其(そ)の事(つと)めざるを念(おも)ひ」と読みます。この読みに従って、漢文に返り点と送り仮名を付けなさい。

念 其 不 事

問三　傍線部(3)「不見所得鹿、反見鮑魚」を現代語訳しなさい。

問四 傍線部(4)「当有何神」を現代語訳しなさい。

問五 傍線部(5)「物之所聚、斯有神」とはどのような意味か。この文章の内容に即してわかりやすく説明しなさい。

【第二講】

〔模範解答〕

一

(1) B と C いへども

(2) 聞キテ三乞人ノ歌フヲ二於門下ニ一

(3) ① 父母 ② 子（順不同）

(4) ① あにいふ〔げん〕をまたんや ② イ

二

問一 C　**問二** あに　**問三** 恐二汝子無レ福耳

問四 A　**問五** B

三

問一 そのあるじ〔ぬし／しゅ〕いまだゆきてとらざるなり

問二 念ヒ二其ノ不ルヲレ事メ

問三 手に入れた鹿は見当たらず、かわりに塩漬けの魚があった。

問四 どんな神であるというのか、神などであるはずがない。

問五 ただの塩漬けの魚が「鮑君神」として祀られて信仰されていたように、本当は違っていたとしても人が神だと信じて人やお供え物が集まると、本当に神として祀られることになるという意味。

〔現代語訳〕

一

周に申喜という者がいた。申喜は母と生き別れた。（申喜は）乞食が門前で歌うのを聞いてこのことを悲しみ、顔色にまであらわれる。門番に言って乞食で歌うものを入れさせて、自ら会って乞食に質問して、言うことには、「どういう理由で乞食になったのか」と。乞食と話していると、自分の母親であった。

よって、父母は子に対して、子は父母に対して、一体で二つに分かれ、（源は）同じ気であって呼吸は別である。草に花や実があるように、樹木に根や芯があるようなものである。場所は違うが心は通じ、憂え痛む心が通じ、痛みや病気はお互いに救い、辛い気持ちを感じあい、生きていれば喜び合い、死んでは悲しむ、これを骨肉の親という。霊妙な思いが心の奥底から発出して、心に応じ合い、二つ〔＝父母と子〕のたましいは一体となる。言うまでもないことである。

二

清の袁枚は江寧を治めていた。町内の韓姓の娘が風に吹かれて銅井村に着いた。町から九十里離れていた。村民は次の日娘を送って家に帰した。娘は既に東城の李秀才の子と縁組していた。李（秀才）が疑うのは風が人間を吹いて九十里（まで飛ばした）という道理はなく、必ず（銅井村の人間と）不適切な関係があると。役場に縁組を取り消す訴えを起こした。袁枚が李秀才を諭して言うことには、「昔、風が女子を吹いて六千里まで着いたことがある。あなたはこれを知っているか」と。李秀才は信じない。元の郝文忠公の『陵川集』を取り、彼〔＝李秀才〕に見せて言うことには、「郝公はその時代の忠臣である。どうしてすすんででたらめな話を作ることがあるだろうか、いや、ない。ただ今年、風が蘇州の女を吹いて、（その吹き飛ばされた先で）宰相と縁組をしたが、（そのように風に吹かれた女は幸せになる要素を持っているのに、縁組を取り消したいという）あなたの子に幸福がないことを心配するだけだ」と。李秀才は詩を読んでとても喜んだ。両家の縁組話はもとのままになった。訴えを裁く者は当然昔のことをよく知っておかなければいけないことがわかる。

三

汝南に田で鹿を捕らえた者がいて、その主人はまだ行って取っていなかった。商人が車十台以上で沢の中を通って行くときに、この鹿が縄につながれているのを遠くから見て、そこで持ち帰った。何もしていない（のに鹿を手に入れた）ことを気にして、一匹の塩漬けの魚を持ってきてそこに置いた。しばらく経って、その主が行くと、手に入れた鹿は見当たらず、かわりに塩漬けの魚があった。沢は人の（行き来する）道ではなく、このようになっていることを不思議に思い、強く神だと思い、何度も（多くの人に）告げて語った。病気を治し福を求めるときに、たくさんの効験がある（と噂になり）、よってほこらを建てて、数十人の巫女、とばりやかね・たいこを整える。百里四方の人が皆、祈り祀りに来て、鮑君神と名付けた。その数年後、塩漬けの魚の持ち主がほこらを訪ねて来て、その由来を尋ねて言うことには、「これは私の魚だ。どんな神であるというのか、神などであるはずがない」と。堂に登って魚を取り、とうとうそれから廃れた。言い伝えとして、「物が集まる所に、神がいる」と。その意味は人が一緒にあがめて、お供え物をすると神ができるというだけなのである。